

れていることを思うとどうでしょうか。どうやら日本人の相撲のリテラシーはハイレベルと言えそうです。科学よりもお相撲の方が多くの日本人にとって、身近な存在のようです。



朝青龍とはやぶさ
(いずれもたくさんの応援を受けています)

しかし本当にそうでしょうか。皆さんは、まわしを着けて土俵入りを体験したことはありませんか。では、タモを持って虫捕りを楽しんだことは？

さらに、生で相撲を観戦する機会と、望遠鏡で月を観察する機会、どちらが多いでしょうか？こんなふうに考えていくと、日本人の相撲のリテラシーを高めているのは、本当の意味での「身近さ」ではないように思えます。

大相撲は開幕のたびにテレビニュースのスポーツコーナーに必ず

取り上げられますし、人気力士はバラエティ番組にも登場します。身近ではないけれど、テレビを通じて、相撲について同じ情報をみんなが持っていることに、相撲人気のヒミツがあるような気がします。

社会派マニアのススメ

では、いつか科学が、お相撲のような人気者になることを夢見て、科学的リテラシーの向上を図るには、どうしたらよいのか考えてみましょう。実は、文部科学省による意識調査の報告書に、一つの手がかりがありました。「学習活動などへの参加が多い大人ほど、地域における子供の学習活動支援に積極的」であり、「地域の人たちとのふれあいが多い子供ほど、積極的な活動を希望し、日常の充足感も高い」と報告されているのです。大人が科学を楽しむ場を地域につくり、子供たちもそこに参加して一緒に楽しむことが、双方の科学的リテラシーを向上させることにつながると考えられるのです。

言い換えれば、大人と子供が一緒にあって天体観測をしたり、化石や鉱物の採集に出かけたり、あ

るいは、タモを持って虫捕りに出かけたりすることで、科学がお相撲のように人気者になるとも言えるのではないのでしょうか。

そして、もう一つ手がかりがありました。それは、「情報の共有」です。科学の楽しさを仲間間で語り合い、ときに外へと語りかけ、広げていくことも大切なのではないのでしょうか。

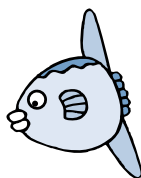
朝青龍は知らないけど「はやぶさ」には詳しいぞという皆さん、科学が好きな大人の皆さん、仲間や子供と楽しみ、「科学って楽しいよ!」と情報を発信して、科学的リテラシーの向上に貢献してみませんか。今日から天然ボケではなく社会に役立つマニアとして、胸を張って楽しみましょう!



地形を作る実験
(大人も子供も夢中)

日常を彩る「楽問」

実物があり、専門家がいて、それらを活用した体験的な学習が可能な科学館や科学系博物館は、科学的リテラシー向上に有用な場として期待されています。同様に、博物館や水族館もそれぞれの分野の「楽問」の入口であり、皆さんの「楽問」へのお手伝いも役割の一つです。皆さん、気が向いたら、ぜひ、海辺の館に足を運んでみてください。日常を彩る「楽問」の種が、きつとどこかに転がっています。



浜辺の館

生命の海科学館

学芸員 山中 敦子